

令和6年度 鹿ノ台小学校学校自己評価

1.鹿ノ台小学校教育目標

自ら学ぶ意欲と豊かな心を持ち、たくましく生きる子どもを育てる

2.今年度の重点課題(グランドデザイン参照)

- (1)多様性への理解と規範意識の向上
- (2)主体的・対話的で深い学びの推進

3.評価のためのアンケート

具体的な目標設定と評価指標を定めて、自己評価と外部アンケートを実施。

- ☐ 児童アンケート 10月1日 1月27日 実施
- ☐ 保護者アンケート 1月23日～1月30日 実施
- ☐ 教員自己評価 10月4日 2月3日 実施

実施後、学校だより等で結果を公表し、分析を行った。

4.成果と課題及び対策について

(1)規範意識の向上に関わる評価項目

①決まりを守る気持ちを育てる

あいさつ、人を思いやる言動と自己有用感の向上

【外部アンケートの結果から】

- 児童アンケートでは、肯定的な回答は、廊下歩行等の決まりについては80%にとどまったが、「学校が楽しい」「授業で考えが深まった」「考えを伝えることがうまくなった」「前よりも自分はがんばっている」など自己有用感や達成感に関わる質問項目では、9割を超え、前期よりもその割合が増えた。
- 善悪の判断等を扱う道徳の授業において「しっかりと考えることができた」と回答した児童は6割に届かなかったが、「概ね」を合わせた割合は9割を超え、前期よりも増えた。

【成果】

- あいさつと廊下歩行については、児童と教員が共通した意識をもち、児童会の取組と教員の指導の両輪で規範意識の向上のため取り組んだ成果が出ている。教員の自己評価において、9割以上が「できた」と回答し手ごたえを感じている。
- 挨拶を軸として、人と人をつなぐ言葉の大切さを学校だより(8回)や全校朝会等(6回)を通して、児童や保護者に繰り返し呼びかけ、一丸となって取り組む雰囲気作りができた。
- 職員室への来室時のあいさつや児童による放送に対し、職員室の教員が積極的に声をかけたりほめたりすることが増え、児童の意欲を高めた。たくさんの先生がとにかく褒めてくれる。子どもの自己有用感も高まる。

【課題】

- ▲教員がいない場面では十分守れていないことが多い。
- ▲集団行動や集団の規律を守れない児童が少なからずいる。

▲挨拶をする子としない子の差があること、いつでもどこでも自分から、自然に声をかけられない場合も少なくない。友達との会話の中で軽々しく「しね」などの言葉をかけあう児童や感情的になった時に悪態をつく児童がいる。

【対策】

- ◆廊下歩行に関する取組を児童会主催で実施したが、取組に対する振り返りができなかった。PDCAのサイクルで取り組む意識を持たせ、継続的な取組へと繋ぎたい。
- ◆上からの指導や事後の指導ではなく、事前指導が重要である。前向きな声掛けやルールの明確化、守れている子が損をしない雰囲気づくりなどとともに、ルールについて子ども達とともに話し合い考えさせる機会をもつなど、子どもを主体とした取組を今後も続けていく。
- ◆学校だよりや全校朝会、児童会からの呼びかけなどを通して、全校で挨拶や言葉づかいについて考え、改善する取組を引き続き進める。特別活動部、生徒指導部、人権教育部でも共通の目標に位置付け、互いに連携、協働した取組を進める。
- ◆挨拶だけでなく、集会や発表会など児童が表現できる場をつくり、職員全体で褒め認める機会を多くすることで、児童の自己有用感を高めていく。委員会や縦割り班活動をその大事な機会として位置づけたい。

②障害や外国籍、LGBTQ等の多様性の正しい理解のための授業や取組、職員研修

【成果】

- LGBTQに関する取組を全ての学年で行い、生駒市人権教育研究大会で、LGBTQなど多様性に関する本校の取組を発表することができた。教員アンケートで9割ができていと回答し自己評価も高かった。
- 国際理解教育を、1年生と2年生を対象に実施した。また、通級指導への理解が不十分な児童がいることから、学級の実態に応じて啓発授業も行った。
- 通級指導、LGBTQ、愛着障害など、直面する課題を意識した職員研修や学習会を持つことができた。

【課題と対策】

- ◆通級指導については、担当教員の時間割がタイトであるが、対象児童がいる学級へは、計画的に通級指導についての啓発授業に取り組む必要がある。
- ◆LGBTQや発達障害などの様々な特性を持つ児童、登校渋りなど不登校傾向の児童が増えてきている（現在、5名、内適応指導教室へ3名）。研修と啓発とともに不登校ルームなどの児童の居場所づくりなど体制づくりを進める（場所と人の確保）。

(2)主体的・対話的で深い学びの推進

③児童同士の意見交流と考えを深める授業づくり

書いて表現する意欲を高め表現力を育成する取組、発信する場の充実

【成果】

- 教員の自己評価では95%が「できた/概ね」と回答し、ほぼすべての教員が児童の意見交流を通じた学び合いや課題解決の授業を心がけ取り組むことができた。

○タブレット端末を使った探究活動や意見交流を通して学びを深めることができたと感じる教員は81（前期57）％、児童は91.5（前期87.8）％といずれも大きく増加した。

○自分の考えをうまく伝えることができたほうだと感じている児童は、前期から後期にかけて増え（74.4→79.1）、昨年度後期（78）と比べても増えた。

【課題】

▲一方で、考えを書くこと、説明することが好きかどうかを訊ねる質問では肯定的な回答をする児童は71.8％でとやや低く、「好き」と答えた児童は前期よりも下がって4割（36.0）にも届かなかった（昨年度39％）。

【来年度に向けて】

◆意見交流の機会が増え、教員、児童ともに、学びの深まりを実感できていることを評価しつつ、児童の主体的な協働的な学びと個別最適な学びの推進に努めていきたい。

◆タブレット端末の活用については、その活用が目的化することなく、学び方により最適なツールとして適切に選択、判断できるように指導していくことも必要である。

◆保護者と教員、児童の回答あるとおり、考えを伝える力についてはついてきているが、自信がなかったり緊張したり、失敗を恐れたりするためなのか、考えを伝えることを「好き」に思えない児童がまだまだ多い。保護者アンケートの自由記述の欄に寄せられたコメントにあるように、子ども達に失敗を恐れない、失敗しても大丈夫というメッセージを伝え、子どもたちに安心と自信を持たせながら取り組んでいきたい。自分の考えを伝えたい、知ってほしいと思えるような取組を重ね、少しずつ自信を持たせていきたい。

④地域と連携した郷土学習やキャリア教育の推進

地域学校協働本部や市教委等と連携した特色ある取組

【成果と課題】

○家庭科ボランティア、まちたんけんや校区探検などの授業支援のほか、昔遊びなど地域の方の支援を得ることができた。先端技術大学院大学学生サークルの全面的な協力で親子で星を見る会を実施できた。囲碁クラブ、電波教室、地域の環境についての学習などは地域の専門知識や技能を持つ方の力を借りて運営ができており、鹿小の特色として今後も大切にしていきたい。

○ただ、市教委と連携したキャリア教育は、今年度十分取り組むことができなかったのは反省である。

○デジタルリテラシーや情報モラルについての出前授業を、NTTドコモとKDDIに依頼し児童を対象に全学年で実施できた。保護者と児童がいっしょに考える機会になればと考え、保護者の方も参観ができるようにしたところ、延べ、76+17=93名の方に参加してもらえた。

(3)保護者、地域から信頼される学校づくり

⑤児童の問題行動への対応

【成果と課題】

- 児童連絡会を定期的に関き学校全体で対応すべき事案を共有し指導に当たる体制が定着している。個別の事案について適宜ケース会議を開き、市教委や特支アドバイザー、SC等の専門家と連携をとって進めた。
- 低学年で様々な問題行動が見られる事象が増えてきた。今年度は、職員と合意の上、専科教員を低学年の少人数指導の担当に充て、フレキシブルな対応ができるようにしたことで、個別の問題行動にある程度対応することができた。

【課題と対策】

- ◆学級の状況を担任ひとりが抱え込まず、学年、職員全体が把握しやすい環境づくりが必要である。現状や対応状況について、可能な限り職員に情報を伝え、共有するようにしたい。
- ◆低学年担当の少人数指導を来年度も置き、児童の安定のため支援ができる体制を整えたい。

⑥「鹿小らしさ」についての共有と取組の推進

学校の方針や授業、学校生活の様子などを学校だよりやXその他の方法で、分かりやすく発信する。

【成果と課題】

- 学校生活や授業の様子、学校の特色や学校が力を入れて取り組んでいることなどを「鹿小だより」（月2回）とX（平日の1回のペース）で発信した。Xの内容を「鹿小だより」にも一部分載せて紹介したり、校内で掲示したりした。
- 「学級や学校は保護者や子どもに寄り添い家庭と連携を図ろうとしているか」「学校の様子は分かりやすく伝わっているか」に対する肯定的な回答は、それぞれ、91%（昨87%）、90%（昨88%）であり、4～2ポイントとわずかだが上昇した。
- ▲逆に見れば、1割程度は「そう思わない」と感じており、その割合を小さくしていく努力が必要。学校の様子や考えを「より詳細に」と考えて伝えてきたが、逆に分量が多い、もっと簡潔にとの声も2件あり、考えさせられた。

5.全体をとおして

- 保護者アンケートの結果は、昨年度と比較して、傾向としては昨年度と大きな違いはなかったが、タブレット端末の活用に関する質問項目以外、肯定的回答の割合が増えた。
- 児童アンケートでは、生駒市の傾向として「学校が楽しい」と回答する児童は他市町村と比較して、少し低いと言われている。本校でもこうした傾向はあるものの、1月末の児童アンケートでは、「学校が楽しい」「考えが深まった」「うまくできた」「がんばっている」など自己有用感や達成感に関わるいずれの項目においても、前期よりも後期の割合が増えた。「挨拶」「思いやり」などより良い人間関係の構築への意識を問うアンケートでは、いずれも9割前後の児童が肯定的な回答をしている。
- わずかではあるが、上向きの結果を励みに、来年度も引き続き取組を進めていきたい。

6.学校関係者評価(学校運営協議会の意見)

①決まりを守り、優しい気持ちの醸成と自己有用感を高める取組の推進	○「知らない人」を警戒する風潮もあり、どこまで声をかけて良いものかためらう場合がある。しかし、地域の一人として登下校中の子どもたちが危ない行為をしている場合は、声をかけるようにしたい。地域で、子どもたちを見守り、育てていく必要がある。 ○学校の取組を引き続き行ってほしい。 ○登下校中、挨拶をする児童が増えている。立哨中の地域の人に、優しく声をかけてくる児童が多い。学校の取組の成果だ。 ○一方で、声をかけても返事が返ってこない子も少しいる。挨拶などは、学校での指導も大切だが、家庭での教育が一番である。 ○声を出すこと、目を合わせることが苦手な子もいる。その子の性格も分かった上で、関わっていくことが大切だ。
②多様性への理解や自分らしさを発見し互いに尊重し合う態度の育成	○高山サイエンスプラザがあり、小さいころから外国籍の子と関わりがあり、本校の良さの一つだ。身近な友達を通して国際理解を進めていくことが重要である。取組を続けてほしい。
③児童が主体的に協働して学び、考えを広げ深める学習の推進	○タブレット端末の教育効果について検証をしてもいいのではないか。タブレット端末を1つのツールとして位置づけ、子ども自身が、自分の学習のために効果的で最適な方法（ツール）を選択できるように指導してほしい。 ○話をして伝えることはできるようになってきたが、自分の思いや考えをまとめて文章にして書き表すことが苦手なようである。意図的に書く機会についてもできるだけ多くとり、書く力をつけてほしい。
④地域と連携した郷土学習やキャリア教育の推進	○地域と協働して、学校の特色である教育活動や地域の人との交流を十分に行っているのも、もっと評価してよいと思う。 ○地域と学校が協働して取り組んでいることを自治会内でももっと知ってほしい。自治会として、発信できないものかと思っている。
⑤問題行動への組織的な対応	○学校の先生は、たいへんだと思うが、引き続き取り組んでほしい。
⑥「鹿小らしさ」についての共有と取組の推進	○「学校だより」を民生児童委員の集まりでも配布し読んでもらっている。児童の様子を知ってもらうことは大切なことだ。 ○学級だよりを見たいと思う保護者もいるが、発信する側の教員の負担を考慮し、子どもに直接関わる業務を優先してよい。 ○教員の負担を軽減するためにも、例えば高学年児童が行事や地域との関わりを発信するなどのやり方も考えてみてはどうだろうか。

7.来年度に残された課題

(1)多様性への理解と規範意識、自己有用感の向上

- ① 決まりを守り、人を思いやる言動を育て自己有用感を高める取組の推進
- ② 多様性への理解や自分らしさを発見し互いに尊重し合う態度の育成

(2)主体的・対話的で深い学びと個別最適な学びの推進

- ③ 児童の主体的で協働的な学びと個別最適な学びを意識した授業づくり
- ④ 児童同士の意見交流を通して考えを深める授業づくり
- ⑤ 書いて表現し説明する意欲を高め、表現力を育成する取組
- ⑥ デジタル機器に限らず学習の内容や目的に合わせ、有効で最適なツールを選択できる力の育成

(3)保護者、地域から信頼される学校づくり

- ⑦ 地域と連携した郷土学習など特色のある学びの推進
- ⑧ 問題行動への組織的な対応
- ⑨ 「鹿小らしさ」についての共有と取組の推進